

第2章 名古屋の生物多様性の現状と目指す姿

1. 名古屋の生物多様性の現状

(1)名古屋の自然と生きもの

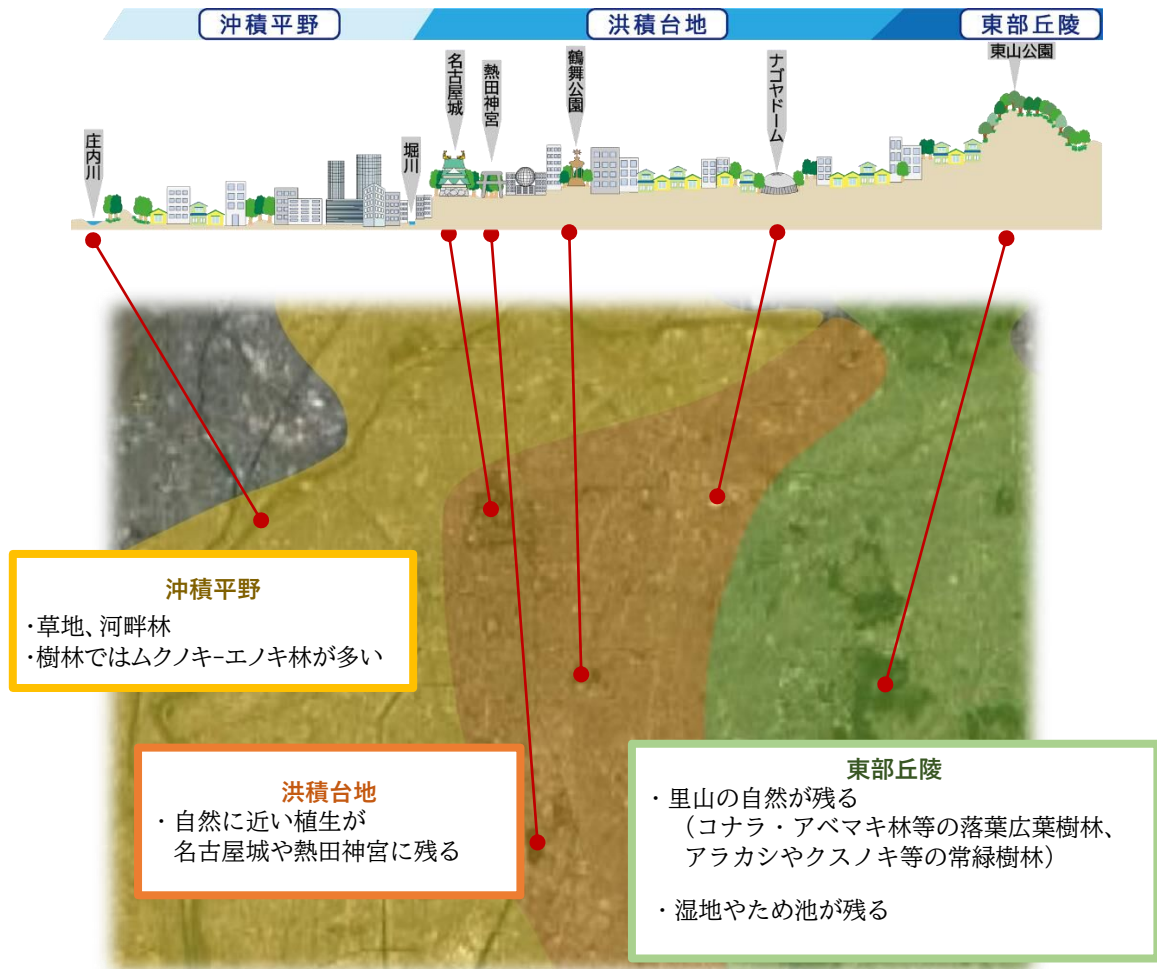
- 約 230 万人が暮らす国内有数の大都市である名古屋では、現在、大部分で都市化が進んでいますが、東部の丘陵地や、庄内川の河川敷、南陽地区西部の水田、藤前干潟などには、生きものの「すみか」がまだ残り、人の生活空間のすぐそばで 6,000 種近くの生きものたちが暮らしています。
- 名古屋市の地形は、西部の沖積平野、中央部の台地、東部の丘陵地の3つに大きく分けられ、そこで見られる生きものに違いが見られます。



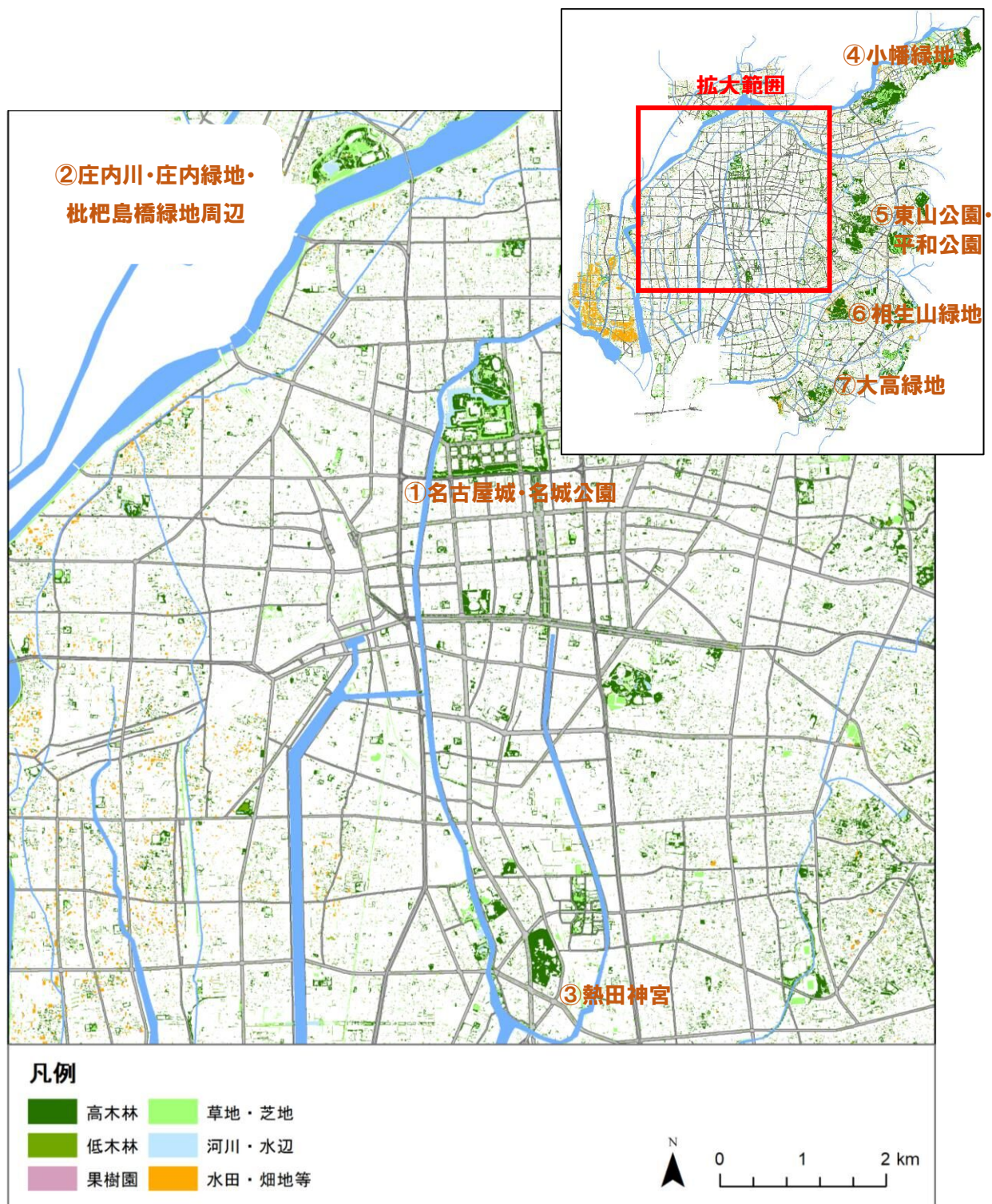
■名古屋の3つの地形区分と自然環境の特徴

地形	自然環境の特徴
西部 (沖積平野)	●河川や海岸の干潟など、水辺の生きもののすみかとなる環境が残っている地域です。 ●庄内川や矢田川といった河川の堤防や河川敷の草地に加え、水田や畑が、様々な生きもののすみかとなっています。 ●庄内川河口部の藤前干潟は渡り鳥の中継地となっており、四季折々に鳥たちがやってきます。
中央部 (台地)	●都市化が最も進んだ地域ですが、点在する大きな公園や城跡・社寺には緑地が残されており、それらが生きものにとって貴重なオアシスとなっています。 ●都市公園では、植えられた木や芝地、花壇などに、都市部に適応した生きものが見られます。
東部 (丘陵地)	●尾張丘陵に連なる起伏に富んだ地形には、比較的まとまった面積で樹林地が残っており、市内では生きものの種類が最も豊富な地域です。 ●点在する大型緑地には、「里山」といわれる環境が残っており、雑木林や湧水湿地を中心に絶滅のおそれのある貴重な生きものが多数見られます。

■名古屋の3つの地形区分ごとの主な植生の特徴



(2)名古屋市内の生きものの主な生息・生育地(陸域)と特徴



図の作成に当たっては、以下の資料を使用：
 令和 2 年度 緑の現況調査(名古屋市)
 平成 23 年度 名古屋市いきものすみかマップ(名古屋市)
 国土数値情報 河川データ(平成 20 年度)(国土交通省)

① 名古屋城・名城公園

- 自然植生に近い植生が存在している。
(外濠堤塘の斜面には全体的にムクノキ、
エノキが優占し、実生も確認される)
- 多様な環境が存在している。
(樹林、堀底部の草地環境、お堀の水辺等)
- 市内でも特徴的な種が見られる。
(コウベモグラ個体群(周辺と分断)やヒメボ
タル、コウモリ類、キツネ等)
- 確認された分類群・種数が特に多い。
(猛禽類や水鳥、キジバトなど樹林性鳥類、
カラスアゲハ等のチョウ類、トンボ類等)



② 庄内川・庄内緑地・枇杷島橋緑地周辺

- 水辺環境が連続して存在している。
(河川敷の草地環境、高水敷の樹林、河岸林)
- 環境を特徴づける種をはじめ、多様な種が
生息している。
(比較的きれいな水を好むカワトンボ類やバ
ッタ類等の草地性昆虫類、河口部や干潟に
はアジサシ類やシギ・チドリ類などの鳥類や
ヨシ原等に営巣する鳥類等)



③熱田神宮

- 大きな樹木が多い樹林地が中心の環境。
(クスノキ林、シイ・カシ等の照葉広葉樹林や、ムクノキ-エノキ林、コナラ林などの落葉広葉樹林等)
- 自然状態が保たれた森林の指標となる種や希少種が多く確認されている。
(オオゴキブリ、ヒルゲンドルフマイマイ等)
- 昆虫類や節足動物の確認種数が多い。
(クモ類、コオロギ等)
- 鳥類も多く生息する。
(樹林環境を好む種等)



東部丘陵（④小幡緑地、⑤東山公園・平和公園、⑥相生山緑地、⑦大高緑地）

- 大規模な緑地が多く、里山林に近い植生が残る。東山公園・平和公園は、一連の緑地として市内で最も広い面積を有する。
- ため池や湿地などが多く存在する。
- 市内で生きものの種類が最も豊富な地域。
特殊な種を除いた、ほぼすべての種が分布しており、絶滅の恐れのある生きものも多く分布する。
- 世界でこの地域のみが生息、あるいは日本での分布の中心がある植物(東海丘陵要素)が存在する。
(シデコブシ、マメナシ、シラタマホシクサ等)
- 都心部では見られない動物が生息する。
(トラツグミ、フクロウ類、ヒミズ、ニホンリス等)



点在する小規模な緑地(水辺)

白鳥庭園や徳川園などの庭園、市内に点在するため池や水田などは、小規模でも水辺に産卵するトンボ類などにとって貴重な生息地です。学校内に設置されたビオトープなどもあります。



白鳥庭園



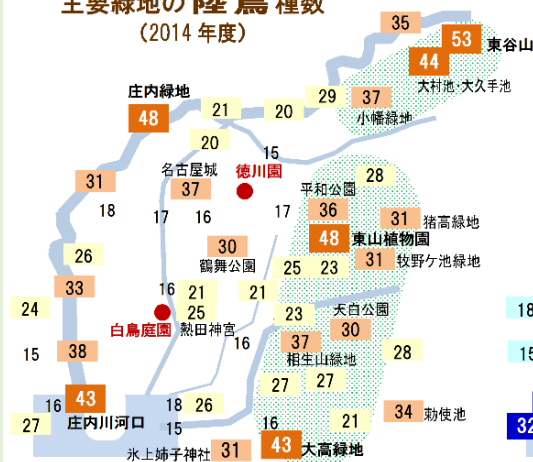
塚ノ杵池

市街地の緑も、馬鹿にできない！

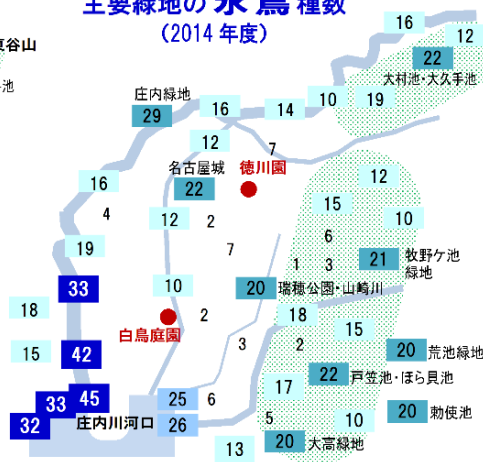
名古屋の日本庭園を中心に生きものの調査を行い、都市の中の小さな自然と人との付き合い方を探る市民団体「都市の自然のモノサシ研究会」が、「名古屋の野鳥（2014年度野鳥生息状況調査報告）（発行：名古屋市）」を分析した結果によれば、市街地の人工的につくられた緑地には、郊外の緑地と同じくらい陸鳥の種数が多い場所があることが分かっています。

名古屋の野鳥

主要緑地の陸鳥種数 (2014年度)



主要緑地の水鳥種数 (2014年度)



- ◆名古屋を取り巻く拠点は…
北・西部：庄内川
東部：点在する大規模緑地
- ◆まちなかの拠点は…
名古屋城、鶴舞公園、熱田神宮
堀川、天白川、山崎川
- ◆上記をコアにして…
小さな拠点がネットワーク形成

【注】

- ◆名古屋市長政土木局「名古屋の野鳥 2014」をもとに作成。
- ◆繁殖期・越冬期の確認種数
(渡り期等の一時立寄りを含まない)
- ◆全市で… 陸鳥 79 種、水鳥 62 種
(他に、渡り期等の一時立寄り 61 種)

陸 鳥		水 鳥	
40 種以上	四隅（▲東谷山／▲大高緑地／■庄内川河口／■庄内緑地） ＋ ▲東山植物園	30 種以上	■藤前干潟（庄内川河口ほか） ＋ ■庄内川下流部 ＊ 庄内川河口は、水鳥・陸鳥ともに多い。
30 種以上	▲東部丘陵の主要緑地、 ■庄内川河口敷 ○名古屋城、鶴舞公園	20 種以上	■天白川・大江川河口、 ▲東部丘陵の大きなため池 ○名古屋城、瑞穂公園・山崎川
白鳥庭園	21 種（2020－22 平均） ＊熱田神宮から 500m	白鳥庭園	9 種（2020－22 平均） ＊堀川に隣接
徳川園	14 種（2020－22 平均） ＊名古屋城・鶴舞公園から 3km	徳川園	3 種（2020－22 平均） ＊名古屋城から 3km

出典：なごや環境大学 共育ゼミ「日本庭園と生物多様性」2022年度報告書（都市の自然のモノサシ研究会）

これらのことから、希少な生きものは別として、普通の種が普通に暮らし、人と共存できる環境づくりは、市街地でも十分に手が届く取り組みであるとしています。

2. 名古屋の生態系ネットワーク

(1)生態系ネットワークとは

- 生きものの多くは、エサをとる、休息する、繁殖を行うなどの様々な場面で、複数の性質の異なる自然を一日、一年、一生を通じて、使い分けながら利用し、生きています。
- ある場所で、ある種が利用する自然が消えてしまった場合でも、その種が移動できる範囲に同じタイプの自然があれば、当該地域内でその種が避難することができ、それに伴う食物連鎖などの生きもののつながりも維持することができます。
- 生物多様性を守っていくためには、同じタイプの自然や異なるタイプの自然が様々な存在し、有機的につながっていることが重要です。このつながりを「生態系ネットワーク」と言います。

生態系ネットワークのイメージ

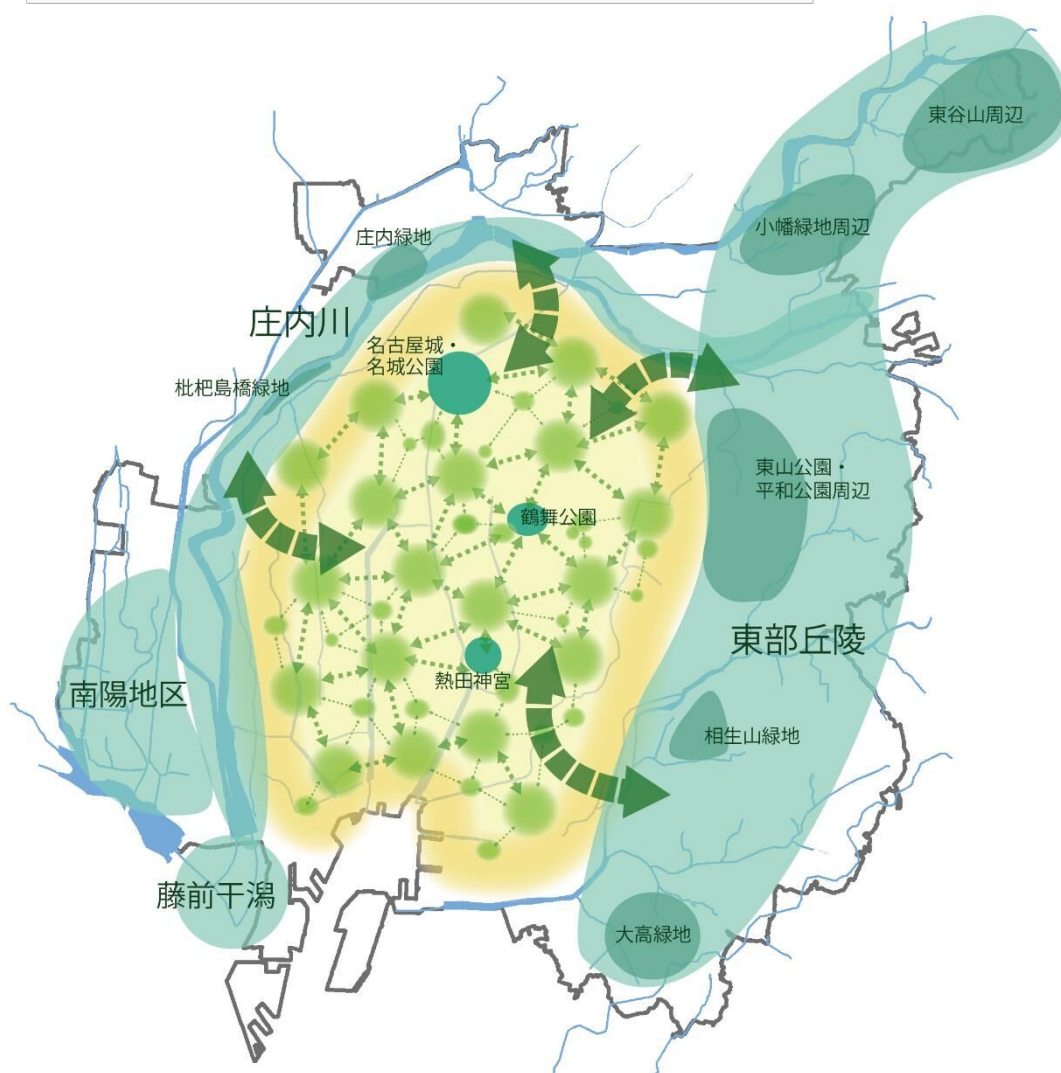


■生態系ネットワークの構成要素

コアエリア (拠点)	・ 生きものの採餌、ねぐら、繁殖等の行動拠点となる場所 ・ 様々な生きものが存在する場所
コリドー (緑の回廊)	・ コアエリア間をつなぐ、生きものの移動経路 ・ 帯状のもののほか、飛び石状のものがある
バッファゾーン (緩衝地域)	・ コアエリア、コリドーの周辺場所 ・ 外部との相互影響を軽減する場所

(2)名古屋の生態系ネットワーク

- 名古屋市では、東部丘陵、庄内川などの河川敷、南陽地区の水田地帯、藤前干潟などに比較的連続した緑地や田んぼ等が広がり、生きものの生息・生育の拠点となっています。
- 一方で、まちなかでは、名古屋城・名城公園や熱田神宮、鶴舞公園など一部を除いて、まとまった緑地は存在せず、小規模な緑地が点在している状況にあります。
- まちなかにおいて、生きもののエサ場や休息場所となる場を増やし、生きものが往来するネットワークを作っていく必要があります。
- また、比較的自然が残る名古屋の周辺部とまちなかをネットワークでつなぎ、名古屋全体の生態系を豊かにしていく必要があります。



3. 将来像

2010年3月に策定された「生物多様性 2050 なごや戦略」で描かれた100年後の夢のなごやの姿です。なごやの風土にあった生物多様性緑化が進み、オフィス街や住宅地にも、まとまったつながりのある生きもののすみかが見られます。また、地域ごとに、自然を活かしたいいきとした市民の暮らしが営まれています。

